

特集② Honda の福祉関連安全運転教育プログラム

運転する楽しさを再び感じてもらうために



今年1月から交通教育センターレインボー浜名湖で「自操安全運転プログラム」を継続的に受講し、8月に運転復帰を果たした山口さん

今年6月より、一定の病気等※1に係る運転者対策に関する諸規定が施行された。今後、障がいをお持ちの方が交通社会へ参加するにあたって、安全教育の重要性が高まっていくだろう。Hondaは2012年より身体が不自由な方に車両運転時の安全性確保に向けた教育機会を提供している。こうした教育機会が運転復帰をめざしてリハビリ中の方に果たす役割について探る。

※1 一定の病気とは自動車等の運転に支障を及ぼすおそれがある病気で、政令で定めるもの

Hondaは「より多くの人にクルマを操る楽しさを提供したい」「交通社会に参加するすべての人の安全を守りたい」という理念のもと、福祉関連安全運転教育プログラムを開発した。その1つは、身体の不自由な方や障がいを克服して運転復帰をめざす方を対象にした「自操安全運転プログラム」。全国にあるHondaの交通教育センターで展開している。このプログラムは、安全運転に必要な「走る」「曲がる」「止まる」といった基本行動を実車走行による体験を重ねることで、運転操作・感覚を把握できるのが特徴である。

6月1日に施行された改正道路交通法の一定の病気等に係る運転者対策

- 免許の取得・更新時に、一定の病気等の症状に関する「質問票」の提出義務
(虚偽記載・報告をした場合は、1年以下の懲役または30万円以下の罰金)
- 一定の病気等に該当する方を診察した医師による診察結果の届出に関する規定の整備
- 一定の病気等に該当する疑いがあると認められる方に対する免許の効力の停止に関する規定の整備
- 一定の病気に該当すること等を理由に免許を取り消された場合における免許の再取得に係る試験の一部免除に関する規定の整備

実車走行で自分の運転能力を確認する

高次脳機能障害からリハビリを経て8月に運転を再開した山口さん(56歳)は、「自操安全運転プログラム」を継続的に受講した。「今はまだ近所に買い物に行くくらいですが、運転していると爽快な気分です」と山口さんは笑顔を見せる。「入院した時は手や足は動かさず、話すこともできませんでした。その時は、周囲も自分もクルマを運転するなんて絶対に無理だと思っていました」。



車庫入れを繰り返し練習することで、車両感覚を身につけてもらう

山口さんのリハビリをサポートしたのが、高次脳機能障害支援施設「ワークセ」が、高次脳機能障害からリハビリを経て8月に運転を再開した山口さん(56歳)は、「自操安全運転プログラム」を継続的に受講した。「今はまだ近所に買い物に行くくらいですが、運転していると爽快な気分です」と山口さんは笑顔を見せる。「入院した時は手や足は動かさず、話すこともできませんでした。その時は、周囲も自分もクルマを運転するなんて絶対に無理だと思っていました」。

山口さんはワークセンター大きな木が実施している「障がい者のための自動車運転技能訓練プログラム」に加え、Hondaの「自操安全運転プログラム」を交通教育センターレインボー浜名湖で、今年1月から7月にかけて9回受講した。「自操安全運転プログラム」は約1時間の内容で、交通教育センターレインボー浜名湖の大島一郎インストラクターが助手席に同乗して行われる。山口さんは2年ぶりにクルマを運転するというところで、1回目から3回目までは交通教育センター内のコースでのトレーニングとなった。まず、加減速による速度調節、低速でブレーキやハンドルの操作を繰り返す。その様子を確認した大島インストラクターは、ハンドルが操作しやすくなるようにハンドルに旋回ノブを取り付けた。すると、山口さんはスムーズなハン



路上でのトレーニングではインストラクターがある地点まで誘導し、そこから自分の記憶を頼りに交通教育センターまで戻るといった課題などに取り組む

ドル操作でパイロンスラロームをクリアしていく。基本的な運転操作ができるようになると、車庫入れなど車両感覚をつかむための訓練。そして、交通教育センター内にある市街地を模したコースで、交差点の右左折などウインカー操作を交えた法規走行へと進む。山口さんが運転中、大島インストラクターはたえず話しかけ負荷をかけた。「例えば『今まで乗ってきた愛車の名前を答えてください』といった質問をしています。これは過去の記憶を思い出している際に、コースの道順や合図など指示されたことを忘れていないかを確認するためです」。

路上での訓練を繰り返し、運転復帰を果たす

その後、3月の4回目からは路上でのトレーニングに移行する(事前に山口さんは公安委員会に申請し、許可を受けている)。最初は交通教育センター周辺の一般道路約5kmを山口さんが運転。「緊張しましたが、交通教育センター内に比べて、自分が『運転できている』とより強く実感することができました」と、山口さんは久しぶりに公道を運転した喜びを語った。大島インストラクターによれば、道路の左側に寄り過ぎる、右折時に

※2 「障がい者のための自動車運転技能訓練プログラム」には認知訓練や「リハビリテーション向けの運転能力サポートソフト」を使っている。 「リハビリテーション向け運転能力評価サポートソフト」の詳細は右記ホームページを参照。 <http://www.honda.co.jp/simulator/safetynavi/rehabilitation.html>

特集②Hondaの福祉関連安全運転教育プログラム



古橋さんはトレーニング車両に運転補助装置を付けて左足でアクセルやブレーキの操作を交通教育センター内のコースで練習



古橋さんも、山口さんと同様に実車走行を通じたトレーニングによって運転することの楽しさを再

古橋さんの場合は、左足のほうが安全であることがわかりました。左足でも自分が思っている以上にスムーズに運転できたと感じます。不安もありましたが、いざ運転を始めると楽しくなってきました」と、古橋さんは右足での運転はあきらめ、これからは左足で練習をしていく考えだ。「マニュアルの愛車を運転できなくなるのは残念ですが、それよりは安全に運転を続けられることを選びました」。

交差点をショートカットするなどの傾向が見られたそうだ。後部座席に同乗していた建木さんは「リハビリテーション向けの運転能力サポートソフト」を使った運転のシミュレーションでも同様の傾向がありました。シミュレーションでの傾向は実車を運転した時にも表れることが確認できました」と話す。5回目以降、山口さんはこうした点に気をつけながら路上でのトレーニングを続け、運転復帰を果たしたのである。

安全に運転を続けてもらうための支援

古橋さん(44歳)も建木さんが運転復帰をサポートしている一人で9月3日、交通教育センターレインボー浜名湖で「自操安全運転プログラム」を受講した。この日は2回目の受講となる。古橋さんは後遺症で右足での運転操作にばつぎがあるため、今回は左足での運転操作の実用性と安全性をトレーニング車両に運転補助装置を付けて確認した。「今回、右足と左足のそれぞれで運転してみても、左足のほうが安全であることがわかりました。左足でも自分が思っている以上にスムーズに運転できたと感じます。不安もありましたが、いざ運転を始めると楽しくなってきました」と、古橋さんは右足での運転はあきらめ、これからは左足で練習をしていく考えだ。「マニュアルの愛車を運転できなくなるのは残念ですが、それよりは安全に運転を続けられることを選びました」。

ターの大島さんにも、優しく接してもらえたので安心して訓練に取り組むことができました。再就職して、早く仕事に復帰したい」と、山口さんは新たな目標に向かって歩みを始めている。建木さんは「これがゴールだとは考えていません。半年後、山口さんの運転を大島さんに再評価してもらう予定です」という。

福祉に関する教育プログラム

Hondaの交通教育センターでは「自操安全運転プログラム」のほか、「移送安全運転教育プログラム」も提供している。これは介助・介護などの配慮を必要とする送迎サービスが増加する中、サービスを提供する方々が、送迎中の安全運転ノウハウや知識を身につけることができる教育プログラムだ。Hondaは、このプログラムの認知・理解向上を図ることを目的に7月24日、交通教育センターレインボー埼玉で「移送安全運転教育プログラム視察・体験会」を開催。バスや電車の利用が困難な方を対象にクルマを使って外出の支援を行っているNPO法人全

福祉に関する教育プログラム

確認し、運転復帰を一つの目標としてリハビリに取り組んでいる。「自操安全運転プログラム」は、運転復帰をめざす方々のモチベーションを向上させる効果もあるようだ。



交通教育センターレインボー埼玉で開催された「移送安全運転教育プログラム視察・体験会」には全国移動サービスネットワークのインストラクター等10名が参加

国移動サービスネットワークのインストラクター等が参加した。事故を防止するための運転アドバイスのみでなく、送迎を利用される方の立場になって体験することにより、利用者へ注意を促す配慮を行うことの大切さを知っていただくための教育内容を交通教育センターのインストラクターが解説。参加者は実車に乗って、静的実技(運転姿勢、車いす使用時の死角と視野など)、ブレーキ、ハンドル操作、バック走行といったプログラムを体験した。移動サービスネットワークみやぎ・福祉有償運送運転者講習インストラクターの大槻正敏さんは「私たちは同乗する障がいをお持ちの方に負担を与えない運転を指導しています。今回はより安全でスムーズな運転操作を学ぶことができました。こうしたプログラムを福祉の現場で普及させていくことは重要だと思います」とプログラムを体験した感想を語った。

Hondaの福祉関連安全運転教育プログラム(「自操安全運転プログラム」「移送安全運転教育プログラム」)に関心をお持ちの医療機関、福祉団体の方は下記にご相談ください。

本田技研工業(株)安全運転普及本部
TEL: 03(5412)1736



正しいハンドル操作、ふんわりブレーキ、スムーズな車庫入れなどのトレーニングを参加者が体験

できるよう、医療機関や福祉関連団体と連携して車両運転時の安全性確保に向けた教育機会をさらに普及させていく考えだ。